

論文の内容の要旨

氏名：藤澤 惇 平

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：小児異物誤飲における年齢的特徴

背景：誤飲物により処置が異なり、原因異物の推定が必要だが、誤飲物や状況を適切に説明できる小児は少ない。周りの大人の目撃がなければ、原因異物の特定は困難となる。内視鏡治療を要した異物誤飲の報告、食道異物や胃内異物など臓器毎の異物誤飲の報告など細分化された報告はあるが、異物誤飲を主訴に来院された児の臨床背景に着目した報告は少ない。本研究は、年齢による誤飲異物の特徴を調べた。

方法：研究デザインは、診療録を基にした探索的観察研究である。2013年4月から2018年6月の期間に日本大学医学部附属板橋病院を受診し、異物誤飲(ICD-10:T17-T18)と診断された16歳未満の小児252例を対象とした。原因異物をタバコ、プラスチック、内服薬、化学薬品、金属、電池、コイン、紙、磁石、ゴム、ガラス、食べ物、その他の13群に分け、各原因異物と年齢の関係をKruskal-Wallis検定を用いて一元配置分散分析し、どの原因異物間に有意差があるかをSteel-Dwass検定を用いて多重比較した。また、月毎の誤飲数をTukey-Kramer検定を用いて多重比較した。

結果：患児の年齢の中央値は15ヵ月で、140人は男児(55.5%)だった。摂取される異物のタイプは、下記の通りだった。タバコ(n=44、17%、[年齢の中央値]12ヵ月)、プラスチック(n=43、17%、11ヵ月)、化学薬品(n=27、11%、13ヵ月)、金属(n=26、10%、35ヵ月)、内服薬(n=26、10%、33ヵ月)であり、誤飲異物間における年齢に有意な差を認めた(p<0.01)。タバコにおける年齢は金属、コインの年齢と比べ小さかった(p<0.01)。内服薬の年齢はプラスチック、タバコ、紙、化学薬品における年齢と比べ大きかった(p<0.01)。

考察：年齢により誤飲をしやすい異物は異なる。乳児の場合、食べられるものが判断できず周囲の物を口に入れてしまうと考えられる。一方、学童の場合、判断はついているものの、遊んでいる際に意図せず飲み込んでしまうことが多いためと考えた。学童の内服薬誤飲のうち半数に精神疾患の既往があり、学童の内服薬誤飲の場合精神疾患を考慮する必要があると考える。

結論：年齢により誤飲をしやすい異物は異なる。年齢から誤飲物を推定することは、小児科医や救急医の実臨床に役立つと考えられる。